

入学試験に関する研究

—高校教育と大学入試との関連について—

大 西 誠 一 郎

I 問 題

本稿では、入学試験に関する問題を、高校教育と大学入試との関連において取りあげたい。

高校教育と大学入試との関連というのは、高校教育の内容を直接の問題とし、そのあり方と大学入試との関連を検討するのではない。終極的には、高校教育の内容の問題にも関連したいけれども、ここではまず、高校入試の成績と大学入試の成績との関係を問題としたいのである。この二つの入学試験成績の関係を明らかにすることによって、そのあいだにある高校教育に関する問題点を考える手がかりを得たいのである。

さて、研究の成果を報告する前に、この問題を取りあげるに至った経過、いわば問題意識を述べておきたい。

まず第一は、この問題を取りあげるについて筆者の頭に浮かぶのは、鳥の集団生活を研究したノルウェーのシエルデルupp・エッベ (T. Schjelderup Ebbe) の報告である。たとえば、A、B、Cの三羽の牝鶏がいて、AはBより強く、BはCより強いとき、それではAは必然的にCより強いかというとき必ずしもそうでないというのである。いわば一種の循環現象といわれるような関係が観察される。その原因は、牝鶏の間で支配者と被支配者とができる条件がただ一つでないためである。たとえば、Aがまだひよこで、Cがすでに成鶏であるときにいっしょにされると、Aはその後いつまでもCをおそれる。実際の体力などではCより強いはずであっても、Cに向かうと全く気力を失って逃げてしまう。そこで前記のような循環現象がおこる。

また、数羽から数十羽の鶏群のメンバー間の関係も、複雑なものである。だいたいにおいては、強い鶏と弱い鶏との順位はできている。ところが、集団のうちの上位の鶏と、それよりずっと下位の鶏とをくらべると、後者は自分よりも弱い少数の鶏に対してはひどくはげしいつき方をする。こういうはげしい鶏も、自分より弱い鶏ばかりの集団の中に入れ、いいかえると集団の上位につかすと、そのはげしい態度はうすらいで、それまでより

ずっとやさしく寛大になる。このことは、個体の性格は、一つには集団内の地位によることを示している。

シエルデルupp・エッベのこの研究は、いろいろな問題を示唆している。教育の現場にも、同様な傾向のあることが感じさせられる。

さて、本研究を取りあげるに至った第二の点は、もっと具体的な事がらである。それは、本学部附属学校における進学に関する事がらである。

本学部附属中学校は、創設以来20年、つねに志願者の中から抽せんによって入学者を決定するという方法をとって来た。ところがただ一度だけ、中学校入試にも、試験による選抜の方法をとったことがある。もちろんそのときは、20倍に近い競争率となって、学力の点では優秀な生徒を採用することができた。ところがその生徒たちが中学3年になったとき、高校進学に関していろいろな問題がおきた。その一つは、附属高校は、附属中学の卒業生の80%ないし90%近く、あるいはそれ以上のものが進学している。附属中学校への入学は抽せんであり、高校へはその大部分が引きつづき進学しているのであるから、学力に関しては、県下の高校に比して必ずしも高いとはいえない。したがってまた、高校卒業後の大学進学においても、県下の他の高校に比して必ずしも高い進学率を示していなかった。このような状況にあって、当時附属中学校の卒業生、とくに中学校入学当時はげしい競争によって入って来た者は、いわゆる優秀な県下の他の高学へ進むべきか、それともとどまって附属高校に進むべきか迷ったのである。

学校当局は、去る者は追わず、来る者は拒まず、という態度をもって臨んだが、最終的には、附属中学校卒業生の中、成績上位のもの10名近くが他の高校、いわゆる県下の一流高校へ進んだのである。したがって、附属高校に残ったものは、上位の幾人かを除いたものだけになってしまった。

こうして、それぞれ三年の年月を経過したが、問題はかれらが大学受験のときに再びおきたのである。もしも高学入試時の成績を中心として考えるならば、当然中学

校時代上位にあり、しかも県下の一流高校で鍛えられて来た者は、大学入試に際しても優秀な成績をとるはずである。それに反し、中学校時代必ずしも上位にいたのではなく、付属高校に残った者は、大学入試に際しては、前者より悪い成績をしかとり得ないだろうと予想される。

ところが事実はこの予想を裏切ってしまった。中学校時代優秀な成績を示し、県下の一流高校に進んだものは、一期校の大学入試においてその半数が失敗した。それに反し、中学校時代必ずしも優秀な成績でなく、そのまま付属高校に進学したものは、きわめて多数が一期校の大学入試に見事合格したのである。中学卒業時の成績は、大学入試時の成績と必ずしも高い相関を示さなかった。

この事実は、筆者の関心をとらえた。その生徒数は20余名に関するものであったけれども、前述のシエルデルップ・エッペの研究と符合するものである。そこで筆者は、これをさらにより多くの者について検討したいと考えたのである。

たまたま、高校入試時の成績についてその資料を利用しうる見通しもつき、他方、大学入試時の成績についてもその資料を利用しうる諒解がえられたので、この研究にとりかかったのである。

この問題を取りあげるに至った経過を、やや長く述べすぎたきらいはある。しかしその中に、この研究の意図、問題意識が述べ得られたことと思う。そこでこの研究の目標をまとめると、次のようにいうことができる。

1. 高校入試時の成績と、大学入試時の成績との関係
2. 高校入試時の成績と、高校在学中の学業成績との関係
3. 高校在学中の学業成績と、大学入試時の成績との関係

この中で、高校入試時の成績は、愛知県において、県下一斉に同一問題について試験し、その結果にもとづいて、各学校は入学者を決定している。そして、いわゆる大学区制をしいている。全県下を二学区に分けて受験させている。そこで、現実には、いわゆる一流校、二、三流校を生ぜしめている。

ここでいう、一流校、二、三流校というのは、通俗的な言い方であるが、それをきめている基準は、高校入試時の成績と大学進学率であろう。高校入試時によい点をとらないと入れない高校は一流校であり、高校入試時に低い点でも入りうる学校は、二流校、三流校などといわれる。もちろん、高校入試時の採点は公表されない秘密のことに属しているけれども、いろいろな形で推測をふくみつつ社会一般の考え方をきめている。大学進学率

は、高校入試の成績に比してもっとはっきりした結果として示される。いわゆる有名大学へ進学した者の数は公表されて、社会一般はそれらを手がかりとして高校の格づけをしている。

こうした一流校、二流校の考え方ができあがると、中学生は、あるいは親も教師もより有名校へと志望するわけである。いわゆる一流高校へ入学すれば、大学進学への道が約束されると考えるからである。

しかし果たしてそうであろうか。有名高校へ入学したものは、ただちに有名大学への進学が約束されているのだろうか。二流、三流の高校へ入学したものは、ただちに有名大学への進学を断念しなければならないのだろうか。別の言い方をすれば、高校入試時の成績は大学入試時の成績に関して、どの程度の予測性をもっているかが問題なのである。そしてその関係は、学校によって必ずしも一様でないだろうことが予想される。このことの検討が、本研究の第一の目標である。

さらに第二には、高校入試時の成績と高校在学中の成績との関係であり、第三には、高校在学中の学業成績と大学入試時の成績との関係である。前者についてはここでとくに問題はないが、後者については、いわゆる大学入試における内申書の取扱いとして、大きい問題をはらんでいる。高校在学中の学業成績が、将来に対してどの程度の予測性をもっているかは、現に多くの高校、大学において関心のもたれている問題である。もしも、高校在学中の学業成績が、それぞれの生徒に対して将来の進学に対して信頼をもって予測できる性質のものであるならば、大学の入学試験はまたその点に関して再考される必要がある。現在の段階においては、その点に関して必ずしも一致した見解に到達していない。その問題は、将来における課題だといわねばならない。本稿においては、その点について十分考察できるまでには至っていないけれども、さらに将来の問題として発展させたい。

II 対 象

本研究のために対象となったものは、昭和41年度、名古屋大学へ受験して合格したもので、またはそれにつぐ成績(X点以上)をとったもので、下記8県立高校からの受験者合計1,035名である。

一宮、半田、岡崎、横須賀
刈谷、旭丘、明和、瑞陵

なお、上記の数は、昭和40年および41年3月に高校を卒業したもので、一年浪人のものをふくんでいる。一年浪人は1,035名の中に117名ふくまれている。

なお、8県立高校の名古屋大学受験者総数は1,500名

である。それゆえに、8 高校受験者総数の69%が、本研究の対象となるわけである。

また、8 高校の名古屋大学合格者総数は571名である。したがって、本研究は、合格しなかったけれどもそれに次ぐ成績のもの464名を加えて研究対象としている。

Ⅲ 研究に用いた資料

ここに用いた資料は、大きく次の3種である。

1. 高校入試時（昭和37年3月，同38年3月受験）の成績
2. 大学入試時（昭和41年3月受験）の成績，総合点 X 点以上をとった者の成績
3. 高校在学中の成績

この成績は、高校からの内申書によるが、さらに次の2つにわかれている。

- (1) 高校最後学年における全教科成績の平均得点
- (2) 高校在学中の全期間における5教科（英語，国語，社会，数学，理科）についての成績の平均得点

なお、上記高校入試時の成績は、中学校全教科について出題された問題に対する成績の総合得点であり、総合得点は、県下公立高校同一基準によって採点されている。

次に、大学入試時の成績は、もちろん選択科目が個人志望学部によって異なっているけれども、総合得点は最高点が同一になるよう計画されている。

高校在学中の成績はすべて高校から提出された内申書によっている。その得点は、各教科とも、5，4，3，2，1と評価されているわけで、上述の2種に応じてそれぞれの平均得点を計算している。もちろん、内申書は個人別に提出されている。そして、同一学校内では相互に比較することはできても、学校間の比較をすることは厳密な意味では問題がある。高校の成績評価は絶対評価だといっても、その評価は純粹に客観的なものを基準にしてできるものではないからである。したがって、本研究では、内申書による評価点は、同一学校内の比較にとどめることにする。

Ⅳ 結果とその考察

以下、これらの資料にもとづいて得られた結果を示しつつ、考察を加えて行きたい。

1. 各種成績平均得点

まず、高校入試時，大学入試時，ならびに高校在学中の成績を、学校ごとに示すと、Table 1 のとおりである。その中、高校入試時成績と大学入試時成績との関係は別に図示する。Fig.1。

Table 1 各種成績平均得点・標準偏差

学 校 名	A	B	C	D	E	F	G	H	T
高 校 入 試 \bar{x}	84.9	81.2	80.1	79.0	79.9	76.1	74.2	82.3	81.6
〃 SD	4.1	6.4	5.9	5.8	4.9	6.1	6.8	6.4	5.6
大 学 入 試 \bar{x}	590.4	568.7	590.6	643.6	603.9	615.4	567.1	575.4	580.1
〃 SD	64.1	63.5	21.4	64.9	58.1	70.2	51.5	43.0	20.1
高 3 ・ 全 教 科 \bar{x}	3.3	4.0	4.3	4.3	3.6	4.4	4.7	3.7	3.6
〃 SD	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.3	0.3	0.5	0.5
高 ・ 全 学 年 5 教 科 \bar{x}	3.7	4.1	4.1	4.3	3.7	4.3	4.6	3.8	3.9
〃 SD	0.4	0.4	0.4	0.4	1.3	0.4	0.3	0.4	0.5

(注) (1) 学校名A, B, C…は、Ⅱ対象のところで記した高校名一宮，半田，岡崎…の順序ではない。全く無作為の順序にならべている。

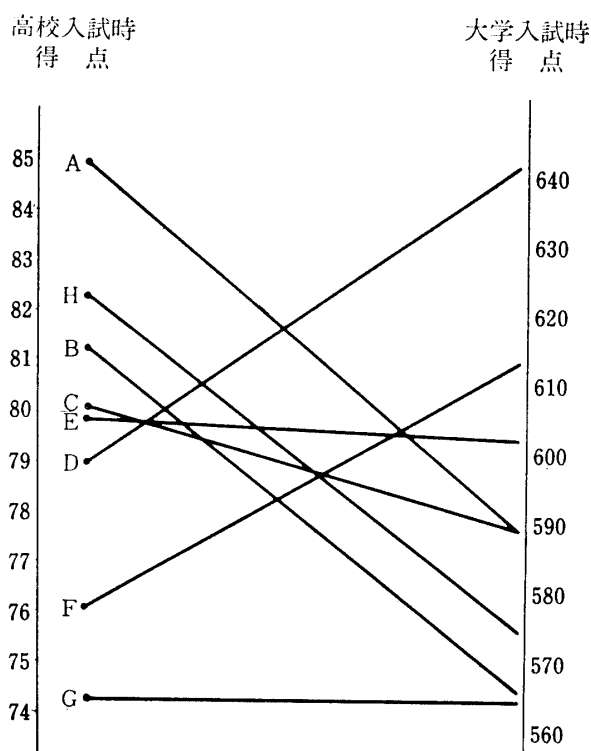
(2) Tは学校のわくをはずし、1,035名の全対象について計算している。以下同様。

まず、高校入試時の成績と大学入試時成績との関係を見ると、かなり顕著な傾向がみられる。G校を除き、高校入試時に優秀な成績をとっている学校の受験生は、大学入試時には成績が悪く、それとは逆に、高校入試時にむしろ低い点をとっている学校の受験生は、大学入試時にはかえって優秀な成績をとっている。Fig.1についてみると、その関係はよく示されている。高校入試時，優

秀な成績をとっているA, H, B校受験生は、そろって右下がりの傾向を示し、ついでC, E校は平行移動、あるいはやや右下がりである。ところが、高校入試時低い点数しかとっていないD, F校受験生は、右上がりの傾向を示し、大学入試時にはきわめて優秀な成績をとっている。このことはまことに興味ある事実であり深く考察を要する点である。

入学試験に関する研究

Fig. 1 高校入試時成績と大学入試時成績との関係
—学校別比較—



ただここで、高校入試時の得点が学校別に示されている。これは、高校入試時の当該学校に入学した全員の成

績の平均ではない。それはどこまでも本調査の対象となった生徒の学校別平均である。たとえば、A校についていえば、同校にはこの対象のほかに、東京あるいは京都のいわゆる有名大学へ受験したものが何十名か除かれている。また、名古屋大学を受験しなかった者は、当然本研究の中に含まれていない。したがって、ここにいる高校入試時のA校の平均得点といっても、それはある限られた一部のものであるのは当然である。またD校は、東京あるいは京都のいわゆる有名大学を受験したものはほとんどいない。したがってここで対象となったものは、いわば同校で比較的成績が上位にあった者たちである。もちろんD校には受験しなかったなお多くの生徒がいるわけである。ここで調査対象とした生徒が、それぞれの学校でどのような位置にあった者であるかについての資料はない。どこまでも名古屋大学を受験し、その成績においてX点以上をとった者だけを対象としている。

次に、高校3年全教科成績および高校在学中の全期間における5教科成績の平均得点は、Table 1 のようである。これらの得点を、学校相互間に比較することはできない。この結果は、その事実だけを記しておくにとどめる。

2. 各種成績間の相関

次に、上記各種成績間の相関を示そう。Table 2.

Table 2 各種成績間の相関

学 校 名	A	B	C	D	E	F	G	H	T
高校入試：大学入試	.283	.283*	.379*	.164	.149	.484**	.106	.126	.120
高校入試：高3全教科	.300*	.499**	.369*	.426**	.004	.318*	.139	.458**	
高校入試：高校全期5教科	.301*	.527**	.382	.425**	.071	.439**	.226	.222*	
大学入試：高3全教科	.504**	.544**	.561**	.543**	.618**	.523**	.141	.544**	
大学入試：高校全期5教科	.567**	.518**	.571**	.540**	.421**	.552**	.156	.593**	
高3全教科：高校全期5教科	.822**	.855**	.853**	.904**	.792**	.694**	.809**	.840**	

(注) *, **, それぞれ5%, 10%以下の危険率で有意の認められるもの。

この結果によってみると、高校入試と大学入試との間には、きわめて低い相関しかない。B, C, F校については、5%および1%以下の危険率で有意な相関が認められるが、他の5校には相関が認められない。高校入試の成績から、大学入試の成績を予測することは、きわめて困難であるといわねばならない。この両者の相関を学校のわくをはずして全対象1,035名についてみると、相関値は.120で、高校入試の成績が、将来の大学入試の成績に対して、いかに予測性がないかがわかる。

次に、高校入試と高校3年全教科成績およびそれと高

校全期間5教科の成績は、E, G校を除き、かなりの相関がみられる。もちろんその値は必ずしも高くないが、前述、高校入試と大学入試との相関よりは高い。

次に、大学入試と高校3年全教科成績および前者と高校全期間5教科成績とは、G校を除き、かなり高い相関を示している。高校在学中の成績が、大学入試の成績とかなり高い相関を示すということは、大学入試における内申書の問題を考える上に、一つの参考となるであろう。もちろんそのことで、大校入試の判定資料として内申書を用いることが妥当であるとするのではない。大学

入試の判定資料とするためには、内申書の学校差をどう取り扱うかという問題が残っている。そのことは今後の問題として、内申書の成績が、大学入試の成績との間に.50程度の相関を示すということは、大学入試の改善という点から、ぜひ考慮されなければならない問題である。

最後に、高校3年の全教科成績と、高校全期間5教科の成績とは、きわめて高い相関を示している。このことは、将来高校の内申書のいずれを取りあげるかという問題を考える上に、一つの参考となるであろう。この両者がきわめて高い相関を示すということは、これを入試判定の資料として用いるには、この両者はいずれをとってもあまり差異のないことを示している。

以上、6種類の相関を示したけれども、高校入試と大学入試との相関はもっとも低く、次いで高校入試と高校在学中の成績はやや高い値である。大学入試と高校在学中の成績はさらに高くなり、高校在学中の2種の成績はもっとも高い相関を示している。期間が接近し、しかも後になるにつれて相関は高くなる傾向を示している。

3. 高校入試時と大学入試時の成績の比較

以上において、本研究の結果のうち、高校入試時の成績と大学入試時の成績との関係が、もっとも中心的なものとして浮かびあがって来る。すなわち、高校入試時の成績と大学入試時の成績との間には低い相関しかない。しかも、高校入試時に優秀な成績をとった高校の受験生は、大学入試時にはむしろ低い成績しかとらず、それとは逆に、高校入試時にむしろ低い点数をとっている学校の受験生は、大学入試時にかえて優秀な成績をとっている。以下においては、この点をさらに追求して行きたい。そのために、まず、高校入試時成績および大学入試時成績をそれぞれ段階別にして比較しよう。

3・1 高校入試時成績の段階別比較

ここで高校入試時の成績段階は、I、II、III、IV、Vの5段階にわけることとする。全対象1,035名を、高校入試成績および大学入試成績によってそれぞれ成績順にならべ、その人数がほぼ等しくなるように5段階にわけ、段階わけは、平均得点および偏差値をもとにしてわけることが考えられるが、入試成績ことに大学入試の得点はX点で切っているため、得点分布はきわめて片よっている。したがってここでは、きわめて単純な操作であるけれども、点数によって5段階にわけることにした。その場合、各段階に含まれる対象数は必ずしも等しくない。これは得点分布上、止むを得ないことである。

以上のようにして求められた段階別のうち、高校入試時における段階別百分率はTable 3・aのようである。

段階別頻数の差の検定はTable 3・bに示す。

ここで示されているように、5つの段階に含まれる生徒の比率は、学校によってかなり異なっている。A校は、成績のもっとも優れたものが入学した学校である。Iの段階に入るものが31%もいるし、II、IIIと成績段階か下がるにつれてその比率は少なくなっている。そして、成績のもっとも悪いVの段階のものは、僅か4%に

Table 3 高校入試時成績による段階別比較
(a) (%)

学 校 名		A	B	C	D	E	F	G	H
高 績 段 階 入 試 時 成 績	I	31	20	8	9	5	7	3	17
	II	27	19	19	14	18	10	6	20
	III	23	18	17	13	21	17	6	26
	IV	14	11	25	21	28	21	21	23
	V	4	33	30	43	28	45	63	14

(b) 頻数の差の検定

	A	B	C	D	E	F	G	H
A		**	**	**	**	**	**	**
B							**	**
C							**	**
D								*
E								**
F								**
G								**

しかすぎない。ところがG校のごときは、Iの段階に含まれるものは僅か3%であり、II、IIIの段階においてもそれぞれ6%にしかすぎない。ところが、成績のもっとも悪いVの段階には63%も含まれるという状況である。

そこで、これら頻数の差を検定すると、Table 3・bのごとくである。すなわちA校は他のいずれの学校とも有意な差が認められる。それはまたH校も同様である。またG校は、A、HとのほかB、C校とも有意差が認められる。しかしその他の学校間には、頻数の差が認められない。そこで、AとHとは明らかに性格の異った学校であるので、それを独立して取扱い、他の6校はこれをまとめて考察することにする。

そこで、A、B～G、Hと学校群別にまとめる。そしてそれぞれの学校群別に、5つの段階に含まれるものが高校入試時と大学入試時とにおいてどのように変化するかをみる。

3・2 高校入試時成績と大学入試時成績の段階別比較

上記のように、それぞれの段階に含まれるものを学校

群別にまとめ、高校入試時と大学入試時において段階別比率を示すと、Table 4・a、4・bおよびFig.2のようである。

Table 4・a 高校入試時成績段階の学校群別比較(%)

学校群		A	B ~ G	H
段階				
高校成績入試時	I	31.4	8.9	16.8
	II	27.1	15.9	20.4
	III	23.1	17.0	26.2
	IV	14.1	22.1	22.7
	V	4.3	36.1	13.9

有意差検定

A : H	**
A : B ~ G	**
H : B ~ G	**

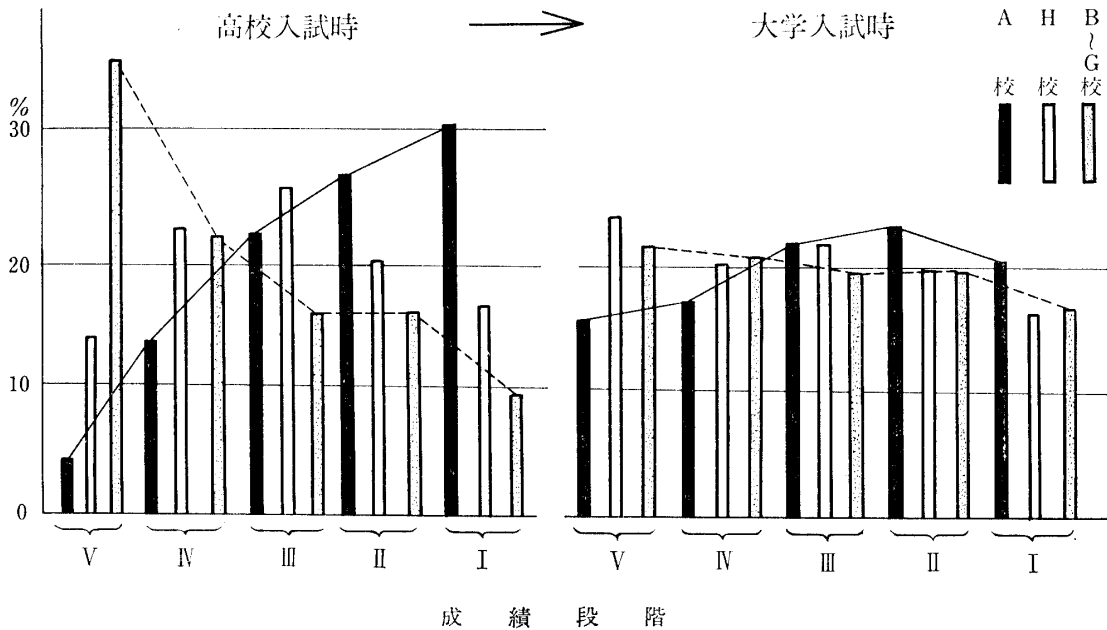
Table 4・b 大学入試時成績段階の学校群別比較

学校群		A	B ~ G	H
段階				
大学成績入試時	I	20.8	17.0	16.2
	II	25.1	19.5	19.4
	III	21.6	19.4	21.7
	IV	16.8	20.6	19.4
	V	15.7	21.5	23.3

A : H	
A : B ~ G	
H : B ~ G	

共に有意差なし

Fig. 2 高校入試時成績と大学入試時成績の段階別比較



ここで示されているようにA校とB~G学校群、H校三者の間には、明らかに有意差がある。すなわちさきにもふれたように、A校は、高校入試時においては、成績の優秀なものがきわめて多く、成績の劣っているものはきわめて少ない。ところが、B~G学校群は、A校とは逆に、成績の優秀なものはきわめて少なく僅か8.9%にすぎない。そして、成績段階がII、IIIと進むにつれてその比率は次第に多くなり、最下位のVの段階のものは36.1%の多きに達している。また、H校はその中間に位し、成績中位のもの(III段階)がもっとも多く26.2%を

占め、そこを頂点として上位群と下位群へと次第に減少して、正常分布に近い形を示している。

検定結果でも明らかなように、この3学校群の間には有意な差が認められる。

ところが、大学入試時の成績段階についてみると、Table 4・bに示すように、学校群別によって著しく似たものになっている。検定結果にも明らかなように、どの学校群間にも有意差を示さない。

すなわち、高校入試時には学校によって著しく格差がある。A校には成績優秀者がきわめて多く、B~G学校

群には逆に成績優秀なものはきわめて少ない。そしてH校はその中間に位している。ところが、大学入試時の成績を中心として考えると、これら3学校群の間に有意差が消えてしまう。

いいかえると、A校へ入学した生徒は、高校入試の時には優れた成績であったがそれは大学入試に至るまで続かない。それに反し、B～G学校群へ入学した生徒は、高校入試時の成績は必ずしも優秀ではないが、大学入試時にはA校とほぼ同等の成績を示すに至るのである。

以上は、高校入試時の成績と大学入試時との成績を段階別に分け、学校群別に比較したのである。次にはこれをさらに個人に還元して比較しよう。すなわち、個々の生徒が、高校入試時と大学入試時の成績段階において、どのように変動するかを求めて比較する。

3・3 高校入試時の成績段階から大学入試時の成績段階への変動

ここで段階の変動は、次のようにして整理する。すなわち、両段階が同じものは変動量を0とし、II→IVのように段階下がったものは変動量を-2、V→IIIのように上がったものは、+2として示す。

変動の整理方法

高校入試時段階		大学入試時段階
I	→	I
II	↘	II
III	↗	III
IV	↘	IV
V	↗	V

例

変	動	変	動	量
I	→	I		0
II	→	IV		- 2
V	→	III		+ 2

このようにして得られた結果を、学校群別に示すと、Table 5ならびにFig. 3のようになる。なお、有意差の

Table 5 学校群別段階変動者比較

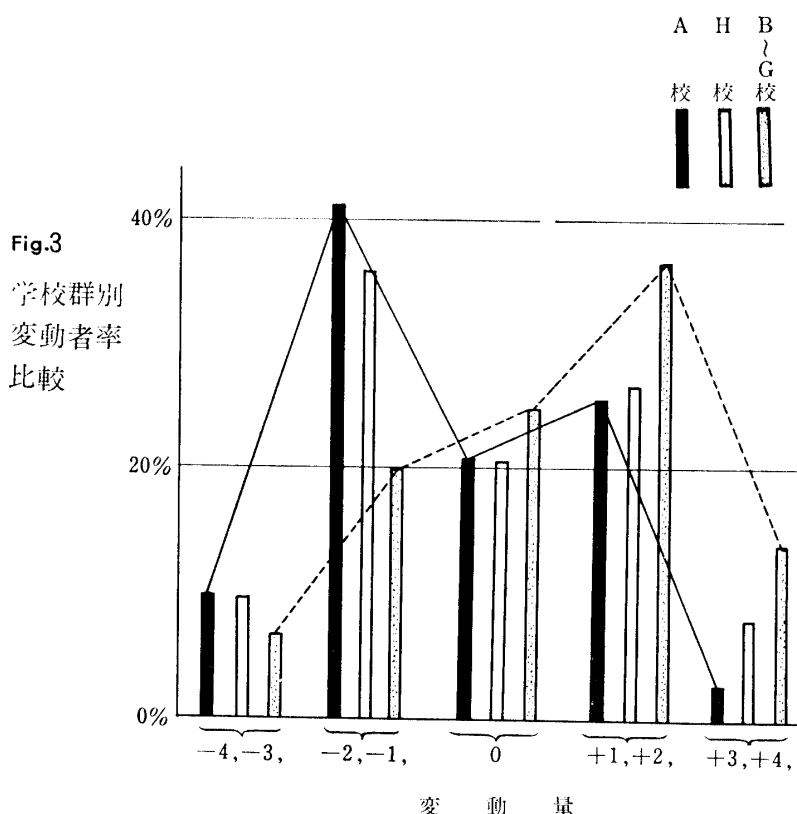
変動量		-4	-3	-2	-1	0	+1	+2	+3	+4
学 校 名	A	2.0	7.8	14.5	27.0	21.6	16.9	8.6	1.6	0
	B	1.2	8.4	15.6	15.6	27.7	12.1	7.2	8.4	3.6
	C	0	4.8	0	12.7	27.0	23.8	19.0	9.5	3.2
	D	1.3	2.6	2.6	12.8	20.5	24.3	20.5	5.4	9.0
	E	2.6	7.1	7.7	14.7	27.6	22.4	10.9	5.8	1.2
	F	0	0	0	12.1	15.6	22.4	24.2	15.6	10.3
	G	0	0	9.1	3.0	21.2	24.3	21.2	21.2	0
	H	2.3	7.1	14.2	21.4	20.7	14.9	12.0	6.2	1.3
学 校 群	A	9.8		41.6		21.6	25.4		1.6	
	B～G	6.2		19.7		24.4	36.5		13.4	
	H	9.4		35.6		20.7	26.9		7.4	

検定結果

A : B～G	**
A : H	*
B～G : H	**

検定は、変動のない0以外は2つつつまとめ学校群別に示すことにする。それによって示されるように、A、B～G、H学校群の間には、成績段階の変動に関して有意差が認められる。

すなわち、A校では成績段階で(-1, -2)下がったものがもっとも多く全体の41.6%を占め、(+1, +2)と上昇したものは25.4%、また(+3, +4)と著しく上がったものは僅か1.6%である。それとは逆に、B～G学校群では、成績段階の下がったものは少なく、(+1, +2)と上がったものがもっとも多く、36.5%を占めている。さらに(+3, +4)と上がったものも13.4%いる。そしてH校は、その両者の中間に位している。



3・4 成績変動の要因

以上、高校入試時の成績と、大学入試時の成績の関係を中心として、その結果を示して来た。そして、高校入試時の成績が必ずしも3年後の大学入試時の成績とは高い相関を示さないことが明らかとなった。単に相関を示さないというだけでなく、学校別にみると、高校入試時優れた成績によっていわゆる一流高校へ入学した者は、大学入試時にはかえって低い成績を示す。それとは逆に、高校入試時必ずしも優れた成績をとらないで、いわゆる二流、三流の高校に入学した者は、大学入試時にはかえって優秀な成績を示すことが明らかになった。これはいったい何に原因するのであろうか。そこにはいくつかの要因が作用しあっているだろうが、以下、その点を考えてみよう。

(1) まず第一は、高校入試時の成績そのものに原因があるのかも知れない。別の言い方をすれば、それぞれの高等学校へ入って来る者の、中学校時代の学習が関係するのかも知れない。

本研究において対象となった高校は、名古屋市内のものと県下の中・小都市にある高校とである。名古屋市内の高校は、ほとんど大部分のものが名古屋市内の中学校から来ている。そして、市内の中学校生徒は、県下の他地区の者よりも、いわゆる高校への進学という点では、いっそうはげしい受験準備をしている。それに対し、県

下の他の地区の中学生は、もちろん受験準備には熱心であっても、名古屋市内生徒のそれほどでもない。もちろんそのことを実証する具体的資料はないけれども、必ずしも見当はずれではないであろう。

もしそのことが前提として許されるならば、高校受験の段階において、ある高校への入学者は、その能力を十分出し切っているのかも知れない。それに反し、他の高校へ受験したものは、その能力を十分出し切った状態ではなく、いくぶん余裕を残しているのかも知れない。そうした状態で高校へ入って来た生徒が、高校三年の間に、前者は必ずしも著しい進歩を示さないが、後者は次第に実力を発揮して上昇傾向を示し、大学受験の時にはかえって優れた成績を示すことが期待される。それが一つの要因であろう。

(2) 次に考えられる要因としては、高校入学後のことが問題として考えられる。すなわち、いわゆる一流高校へ入って来た者は、中学校時代には、学級あるいは学年の中でも例外なく成績の優れた者として自信にみちて生活して来た者たちである。しかし、ひとたび高校に入ると、そこにははげしい競争があり、また序列ができる。そして高校においていろいろな評価がなされるが、その時ある者は依然として上位に位置しているが、他の者は中位、あるいは下位の地位に甘んじなければならなくなる。

本学部3年のある学生は、高校時代の体験を次のように記している。

「中学ではいわゆるできる生徒として先生から目をつけられ、クラスではリーダーとしてかなり自信をもって暮らしていた。しかし俗にいう名門の高校へ入学して、そこでの最初のテスト、それまでの私の自信は一挙にくずれてしまった。全般的にみればそんなに悪くないのだろうが、優秀な生徒がとくに目立つから、私は彼らに対する劣等感からつねにおびえていた。なれない一年生の間はこの状態がつづき、友だちと一っしょに溶けあうこともなく過ぎていった。二年生になって少し明るさがとりもどせたが、親しい友だちができて、いろいろ話しあうことができたからである。そしてその友だちは、私と同じような感じ方をしている人たちであった。その中でも私はひかえ目な存在であったが、むしろ私はその方を好んだ。できるだけ目立たずにそっと生活することは、ああいう学校では恥をかかない有力な手段であった。」

一流高校へ入って、かえって消極的な構えをとるに至った経過は、ここによく示されている。ここに示したものは一つの事例であって、それがすべてでないことはもちろんである。しかしこれを、一つの典型的な事例として認めることはできる。

それでは他方、いわゆる二流校、三流校へ進学したものはどうであろうか。中学校では上位であったものもいよう。しかし必ずしも上位にあったものばかりではない。それらのものが一っしょに学習をつづけることは、その中でも上位に位置するものは、次第に自信をもち、積極的に学習するのではないか。上に引用したのとは対照的な本学部三年学生の記録を引用しよう。

「高校にはいると、最初の1年間はそれに適応するため、いろいろな点で苦心しなければならなかった。学級や学年の基準はどれくらいであり、自分をどのようにその基準にあわせればよいかと、ようすをうかがっていたような感じがする。そのうち私は、クラブ活動に熱をいれるようになった。そこでは、先生と話をする機会や、先輩と話をする機会も少なくなかった。学級では、クラブ活動に時間を割いても、一定の成績をとりうる自信もできて来た。中学時代の思索型から活動型へと変化した。視野も広がって、高校2年の後半からは、全くマイペースで進むことができた。」

上にあげた二つの事例は、たまたま典型的なものであるけれども、ここに現代高等学校がもっている問題点を露呈していると思う。

(3) なおこのほかにも、いわゆる一流高校は、大学受験準備にそれほど積極的でないとも言われる。そのよう

な学校では、生徒の能力はおのずから発揮されるので、学校がやかましく言わなくてもよいのだという。それに反し、他の高校では、成績上位のものに集中して受験体制を整えて行く。そのために、結果的にはいわゆる二流、三流の高校にいる上位の者の方が、大学受験に際しては優れた成績をおさめるのだという。

なおこのほかには、通学時間のことも問題であるかも知れない。大学区制であるために、一部生徒の中には、かなり無理をして通学しているものもいる。とにかく一流高校へ入れば、一流大学へ入学できると速断して、無理をしても一流高校に入学するのである。そうした点で無理のある者は、3年間に成績が次第に下降することも考えられる。それに反し、通学の上では無理をしないで、いわゆる二流、三流校へ通っているものは、時間的余裕もでき、3年間という期間についてみると、かえって優れた成績をおさめうるとも考えられる。

IV 要約と今後の問題

以上、昭和41年度、名古屋大学を受験した愛知県立8高校生徒1,035名を対象として、高校入試時の成績と大学入試時の成績との関係を検討した。用いた資料は、県下一斉に行なわれる高校入試時の成績と、大学入試時の成績、さらに高校在学中の成績とである。ここで得られた結果の主なものは、次のようである。

(1) 高校入試時の成績と、大学入試時の成績との間には、余り高い相関を認めることができない。

両者の成績は、それぞれの成績を5段階にわけて学校別に比較するほか、個人別にその段階がどう変動するかもしらべたところ、上記の傾向はいっそうはっきり示された。

このことから、高校入試時の成績から大学入試時の成績を予測することはできない。むしろ、いわゆる一流高校に入学したものは、大学入試時において成績が下降する傾向を示し、他の学校に入学したものは逆に成績が上昇する傾向さえみられる。

(2) これらのことが、どのような要因によっているかは、具体的に検証する資料がない。それらについては、さらに検討することができればと考えている。

また、このような成績が、大学入学後の成績とどのように関連するかを追跡することも、一つの課題である。

(3) なお、資料として整理したもののうち、高校入試時の成績と、高校在学中の成績の相関はかなり高い。また、高校在学中の成績と大学入試時の成績との相関はなおいっそう高い。

高校在学中の成績は、高校最終学年における全教科成

入学試験に関する研究

績の平均得点と、高校在学中の全期間における5教科についての成績の平均得点をとったが、それらと大学入試成績との相関はかなり高い値を示している。

付記 本研究を進めるにあたっては、愛知県教育委員会ならびに各高等学校からいろいろご協力をいた

だいた。さらに結果の整理にあたっては、本学部大学院学生織田揮準君からいろいろ援助をいただいた。ともに記して厚く感謝の意を表したい。

なお本研究は、昭和42年度東海学術奨励金によって行なわれた研究の一部である。

(1968年1月)